プリキュアオールスターズＤＸ３Revival　導いて！幸福の成す奇跡

桔梗　刹那・Ｆ・セイエイ　シルバー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プリキュアオールスターズＤＸ３Ｒｅｖｉｖａｌ　導いて！幸福の成す奇跡

【Ｎコード】
Ｎ１０３０Ｙ

【作者名】
桔梗　刹那・Ｆ・セイエイ　シルバー

【あらすじ】
プリズムフラワーを巡る激闘から数ヶ月後、雨牙真夜＝キュアセイバーの前に現れたのは、存在だけで世界を滅ぼす力を持つ最強の敵！そのとてつもない威力に、彼女は最大の危機を迎える。そして、その敵を追い、２３人のプリキュアたちに別世界から三人の「天上人」が姿を現す。彼女たちに導かれ、プリキュアたちが足を踏み入れたのは、誰も知らない未知の領域だった！新たな冒険とともに、伝説の戦士の最後の戦いが始まる！

その敵の名は・・・・・「幸福」。

最初の挨拶

みなさん、おひさしぶりです。桔梗です。

２０１１年１１月１日本日、この度遂に私は最後の作品を執筆することを決意しました。

思えば私にとって記念すべき小説第一作「プリキュアオールスターズＤＸ２ＮＥＸＴ　新たな伝説☆銀河最大の超決戦！」（以下「ＤＸ２ＮＥＸＴ」）を執筆してから早いもので一年が経過し、その後も「仮面ライダースカルＶＳキュアムーンライト」「プリキュアオールスターズＤＸ２ＴＨＥ　ＬＡＳＴ　光と闇☆最後の戦い！」（以下「ＤＸ２ＴＨＥ　ＬＡＳＴ」）「真プリキュアオールスターズ！」「花妖　～蒼い追憶～」「ＣｕｒｅＲｅｂｅｌｌｉｏｎ　Ｅｐｉｓｏｄｅ：Ｂｌｏｏｄ」といった計六作の作品を書いて参りました。

しかし、筆者として小説を書く限界というものを徐々に感じていき、本作を最後に筆を置くことを決めました。これまで私の作品を読んできてくださいましたみなさんにはたいへん申し訳ありませんが、私は悔やんでいません。本作完結後は普通の読者に戻り、みなさんの作品を楽しませていただく次第です。

さて、本作は私の小説第一作と第三作「ＤＸ２ＮＥＸＴ」「ＤＸ２ＴＨＥ　ＬＡＳＴ」の続編で、また刹那・Ｆ・セイエイ氏作「プリキュアｖｓプリキュア」との競演（コラボ）作品という形にもなっている刹那氏ともう一人、シルバー氏も含めた三人による共同企画作品であります。なので初めて読む方は先に先述した三作品を先に読むほうをお勧め致しますし、むしろそうしたほうがより本作を楽しめると思います。

一応来年（２０１２年）３月１７日公開予定の映画『プリキュアオールスターズ　最新作（仮）』までの完結を目指しています。

最終作（フィナーレ）に相応しい作品になるように全精力を入れて頑張ります。

長い本文を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。
それでは、本作を最後までごゆるりと、お楽しみください。

プロローグ

「また・・・、別の世界へ飛ぶの？」

そう、茶の色をした短髪の少女は目の前の少女に問いかける。『また』という言葉に紫のツインテールの少女はつい苦笑いを浮かべると、仕方なさそうに首を縦に振る。

「うん・・すぐに来てほしいって『彼女』から緊急に連絡が入ったの。しばらく『この世界』を留守にするわ」

「・・あのさ、だったら私も・・・っ！？」

『一緒に行こうか？』と言葉を続けようとした口を人差し指で閉じられ、短髪の少女は少しだけ狼狽の色を浮かべる。少女の口を封じたツインテールの少女はそっと指を離すと、その口から漏れるはずだった言葉の問いに答える。

「悪いけど、今度はあなたを連れてはいけない。今度の出張は私もまだ詳細を聞いていないの。もしかしたら長引くかもしれない。もし、またあなただけを連れて行ったら、『夢原のぞみ（キュアドリーム）』がまた頬を膨らませるでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

『夢原のぞみ』の名を出され、短髪の少女は黙らざるをえなくなる。というのも、今『夢原のぞみ』は自分がそばにいて支えてあげないと精神が崩壊寸前にまで追い込まれる・・・は大袈裟としてもそれに近いギリギリの状態を保っている。自分以外にも彼女を支えてくれる人はいるのはいるが、万が一暴走に至ったら、誰か止められるだろうか。短髪の少女はほんの少しだけ思考し、いないと結論を出す。もはや『夢原のぞみ』の中で自分という欠片（ピース）が不可欠となっている。彼女が暴れたら、張り手を食らわせてでも自分が抑えなくてはならない。

とはいえ、『この世界』が地獄に変わらなければ、『夢原のぞみ』もああならなかったはずだ。

しかし、現実はいつだって自分たちの目に嫌になるくらい焼きつける。
この地獄では、自分たちは世界の敵と人々に認識させられていた。かつての栄光が一体どうしてここまで転落していったのか、それは被害者の自分たちも知りたい。世界中から敵と仕立てられた自分たちはいつしか『世界破壊派』と『世界守護派』に分かれ、仲間同士で戦いの火蓋が切られ、現在も続いている。これから先も醜い争いが続くことが確実の中、自分までが一時とはいえ地獄から逃れたら、きっと『夢原のぞみ』は自分をさぞかし恨めしく思うだろう。
「・・・・・分かった」
短髪の少女は肩を竦め、嘆息を漏らした後で『この世界』に残ることを選ぶ。彼女の返事を聞いたツインテールの少女は「ありがとう」と一言礼を述べると、静かに短髪の少女の首の後ろに両腕を回し、きゅっ、と抱き締めた。
「なるべく早く帰るから。『のぞみ』のこと、お願いするわね」
「オッケー、任せといて・・」
そう返答を聞き、ツインテールの少女は親友『美墨なぎさ』と別れたのだった。

『美墨なぎさ』と別れた後、ツインテールの少女は指定の場所へと到着する。すでにひとりの少女が待機しており、彼女は声をかけた。
「来てたの・・」
「うん。しかし遅かったね」
「ちょっと親友とお別れをしてて・・ね」
背中には翼なのだろうか、アルファベットの「?」状に生えている青と白を基調とした衣装の少女＝天上刹那が指摘すると、少女は再度苦笑いをした。
「・・それで、用件は?」

が、それもすぐに引き締まった表情に変わり、緊急召集の件について尋ねる。すると、刹那は無表情のまま一言だけ伝える。
「狩り(ハンティング)」
「？・・・標的(ターゲット)は？」
刹那は再び一言で返した。
「『幸福』」
「『幸福』・・・？」
理解できずにいると、刹那は無言でファイルを手渡した。表面にずらっと標的のデータが綴られている。ツインテールの少女はそれを取り、何も言わずに速読していく。次第に少女の表情に狼狽が見え隠れし、全ての文字を読み終えた頃には口の開閉を何回か繰り返したが、出てくるのは「あ・・」とか「う・・」ぐらいの言葉にならない声が続くばかりだった。
「こんな・・・本当にこんな怪物が存在するというの？」
「『ヴェーダ』が計測し、すぐに私たちのほうで調べた。間違いはないはず」
「その怪物が今、別の世界に確実に存在している・・と？」
「そう。しかも厄介なことに問題はさらに深刻化しようとしているかもしれない」
「？・・・どういうこと？」
刹那の言葉にツインテールの少女が疑問を口にすると、無表情だった彼女は一瞬眉間にしわを寄せ、ばつが悪い表情をしたが、すぐに重い口を開いた。
「・・ついさっき私たちの他に『幸福』に近づく存在が確認された」

――――数時間前。
一軒の邸宅に四人の少女が門扉の形状をした物体の前に集結していた。
「サバーニャ、これ頼まれていたデータ・・」

「ありがとう、バインド」
バインドと名を呼ばれたルビーのように紅い瞳の少女はサバーニャと名を呼んだ左目に眼帯を掛けた少女からデータを受け取り、黙読と同時に脳裏に数多の情報を詰め合わせ(インプット)をしていく。幾多の情報をわずか数分で記憶したサバーニャは即座にデータをゴミ箱へ放り投げた。
「永遠の楽園・・・か」
「何？それ」
ふいに口から漏れた言葉に反応して美少年の容姿をした少女が尋ねる。彼女の問いに、眼帯の少女は視線を合わせることなく返す。
「『獲物』が住処としている所よ。今から私たちはそこへ向かい、『獲物』の帰還を待機する。詳細はおいおい解説(はな)すわ」
「へぇ・・でもさ、何もそんな回りくどいことしなくても、『獲物』が今滞在している位置を確定すればいいじゃな・・」
「アンタ馬鹿ぁ！？」
しかし、美少年風少女の台詞は突如眼帯している以外はサバーニャとと瓜二つの少女による呆れ声により中断された。「えっ？」とする彼女に少女は眉を顰(ひそ)めたまま人差し指を指し、肉薄する。
「デスパイア、アンタもう忘れたの？『テレポートゲート』は一つ：しか世界を渡れない中傷的な欠点があるってことに。もし現時点『獲物』がいる位置に飛んだとしても『獲物』が次元を超えて逃げたら、あたしたちはそう易々と追いかけることはできないでしょうが。それよりも住処としている場所に先に飛んで『獲物』を捕獲する罠を仕掛けたほうが賢明ってもんでしょ？」
「あ、なるほど・・・でもグライファー、どうやって『獲物』を捕獲するのさ？」
「それは・・」
「グライファー、あたしが答える」
すると、眼帯の少女は懐から拡音機に似た形状の拳銃と三、四の銃弾(ブリッド)を三人に見せた。三人の視線が自身に注視されているのを確認

して、眼帯の少女は説明を始める。
「拳銃(コレ)は『ノイザスピーカー』、凶音波発信式銃よ。そして銃弾(もうひとつ)は『マインド・カードリッジ』、標的を捕捉(キャッチ)して引き金(トリガー)を引けば特殊音波が放たれて相手を洗脳するよう改造してある。この二つで『獲物』を完全に捕獲できるはず・・」
「『はず』？テストしてないのか？」
「何しろ『獲物』が『獲物』だからね・・・でも」
ジャキ。
眼帯の少女は銃弾(ブリッド)を装填音を鳴らした。
「一発で決める。『この世界』のためにも・・」
「「「・・・・・・・・・・・・・・・」」」
その台詞に込められた彼女の覚悟と決意に三人の少女はもう何も言わなかった。
そんなこと、自分たちだって百も承知だったから。
卑劣な陰謀に嵌められたあの日から、少女たちの世界は大きく変わり始めた。
行き場を失い、地獄と化した『この世界』。
自分たちを蔑み、簡単に存在を弾き出してくれた『この世界』。
今は『監視者』の名のもとで文字通り、監視をしているにすぎないけれど。
いつか必ず『この世界』に思い知らせてみせる。
創造の前には、破壊が必要ということを。
「さて、そろそろ行きますか」
『テレポートゲート』が扉を開く。
『獲物』を求め、四人の少女は未知の領域に足を踏み入れた。

『幸福』に接近する者の存在についてツインテールの少女が何者なのかを尋ねたが、刹那は力なく首を振り、分からないと伝える。
「ただ・・」

「ただ？」
「唯が言うにはわずかだけど闇の気配を感じたみたい。少なくとも同業者じゃないのは確か。もし『幸福』が邪悪なる者の手に渡り、しかも最悪『この世界』に現れたとしたら・・」
「『この世界』は滅びの危機を迎える・・わね」
そこから先の言葉をツインテールの少女が継ぐと、刹那はうなずく。
「だから、そいつらよりも早く私たちがその怪物を始末しなければならない・・・そういうことね。話は分かったわ。で、その怪物は今どこの世界に？」

「『救世主の世界』または『堕天使の世界』・・」

「・・・あまり聞いたことがない世界ね。そこに『彼女たち』はいるの？」
「現時点では『その世界』の日本に２３人の存在が確認されている。ちなみに『その世界』にも『美墨なぎさ』や『夢原のぞみ』の存在が確認されている。無論『この世界』とは全くの別人」
「・・ということは、『花咲つぼみ』と『明堂院いつき』も？」
「・・存在している」
「・・・・・・・・」
別の世界とはいえ同じ顔と声を持つ親友が存在していることに少しだけ歓喜を覚え、会ってみたいとほんの欲が芽生えたツインテールの少女だったが、『花咲つぼみ』と『明堂院いつき』のふたりも存在していることも知り、すぐに憂鬱に変わる。
彼女からしてみればその理由は至極当然なのであるのだが、その説明は後々後述する。
「あとアメリカ・ニューヨーク市に一人・・・いや、二人というべ

きか」
「？・・・どういうこと？」
「百聞は一見に如かず。これが彼女・・いや、彼女たちのデータ」
再度刹那がデータを手渡す。即行で黙読し終えたツインテールの少女はデータをファイルに戻すと、しばらく思い詰めた表情で棒立ちになっていた。
「『幸福』狩りには日本にいる『彼女たち』の協力が必要となるかもしれないけど、そのふたりは・・・どうする？」
ツインテールの少女はしばし黙考する。が、もう決断したらしく、視線を刹那に向ける。
「・・正直言って危険があるわ。光と闇の両方の力の持つのなら、なおさら・・・」
「でも神様は意地悪がお好き、みたい・・」
ふいに背後からの声にツインテールの少女は急いで振り返る。さらり、と金の長髪を優雅に風になびかせた少女＝天宮唯がふたりに接近を試みていた。彼女の登場に少女が口を開くよりも早く、唯は言葉を続けて伝える。
「『ヴェーダ』が『幸福』の現時点での位置を特定したわ。『彼女』は今ニューヨークよ」
「「！・・・・・・・・・・・・・・」」
「ニューヨークに限らずだけど、大都市は人口が集まり、その分欲に飢えている人が数多く存在する・・・『幸福』にとってはまさに持ってこいの場所なのよ。どうする？」
ちっ。
軽く舌を打つ音が聞こえ、刹那と唯は少女を注視する。少女が苛立ちを抑えているのは火を見るよりも明らかだった。
どうしてこう厄介事は悪い方向へ転がっていくのか。こちとら、早く任務を終わらせたいのに。
せめてこれ以上厄介事が悪くならないのを祈るばかりだが、そうもいかないだろうと少女はあきらめにも似た吐息を吐く。

「・・私がニューヨークに飛ぶ」
結論として、少女はニューヨークには一人で行くことを選択した。
やむをえない。こうなったら、厄介事がさらなる花を咲かせる前に自身の手で早急に芽を潰すのみだ。任務は迅速且つ早急に遂行しなければならない。それが『この世界』を滅ぼすかもしれないのなら、なおさらだ。
ただし、万が一の場合というのもある。厄介事は増やしたくないが、如何なるケースも想定しておかなければ、遂行すら不可能に入る。
だから、少女はふたりに伝えた。
「私が想定したケースに入った場合、刹那と唯は、日本の『彼女たち』に接触を試みて」
「「・・分かった」」
「それじゃあ、ミラクルライトの準備を・・」
ふたりの返答を聞き、少女は小さなスティック状のペンライトを手に取り、スイッチをＯＮにする。　ミラクルライトに閃光が炸裂し、瞬時に三人の身体を包み込んだ。

「『救世主の世界』・・あるいは『堕天使の世界』へ！」

少女＝水澤睦月の声に反応して閃光は弾け、少女たちの姿をその場から掻き消す。
幾多の次元を渡り、着々と光は目的地へと接近していく。
世界から滅亡を回避するため。
『天上人』の名のもとに。

プロローグ（後書き）

きっと「ＤＸ２ＴＨＥ　ＬＡＳＴ」よりも長い、最長プロローグになったと思います。
次回『救世主の世界』『堕天使の世界』に突入します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1030y/

プリキュアオールスターズＤＸ３Revival　導いて！幸福の成す奇跡

2011年11月1日03時13分発行